中国新聞

(3) 内政・総合 17版　2009年(平成21年) 5月3日 (日曜日)

今を読む

長崎大熱帯医学研究所教授
山本 太郎

「正当な危機感」抱こう

フェーズ5

四月三十日午前五時すぎ、BBC放送のニュースを見ながら本稿を書き直している。時間単位で収集され、解析される情報が変わる。緊急記者会見で世界保健機関(WHO)事務局長マーガレット・チャン氏が、新型インフルエンザの警戒水準を「フェーズ5」に引き上げたと発表した。世界的大流行(パンデミック)の一歩手前である。

「各国は警戒レベルを引き上げ、必要な行動に移るように」。事実上の新型インフルエンザ発生宣言である「フェーズ4」への引き上げから、わずか二日後のことになる。

○　○　○

拙著「新型インフルエンザ　世界がふるえる日」(岩波新書)の中でこう書いた。

「以下のような感染症があなたの暮らす町で起こったとしよう。九月十二日、風邪のような症状の患者が一例発生する。九月十八日、患者数は六千人に達する。九月二十四日、患者数は一万二千人に達し、七百人の死亡が確認される。六カ月後、人口の25%が感染し…(以下略)。これは架空の話ではなく、一九一八年(スペイン風邪の世界的流行の年)にアメリカのマサチューセッツ州で実際に起こった話である」

メキシコでの豚インフルエンザ流行の最初の報道から約一週間で、感染が確認された国は十カ国、感染拡大が疑われる国は二十二カ国を超え、疑い例は三千人に迫っている。世界的広がりという観点からいえば、流行の拡大速度は一九一八年当時より速い。そうした中で冷静かつ、適切な発生宣言だったと思う。

情報が刻々と変化する中で、今後の流行の様相がどのようになるか、今のところ誰にもわからない。WHOのケイジ・フクダ博士も「インフルエンザウイルスは容易に変異する。より深刻な病気を起こす方向にも変異するし、病原性が弱まる可能性もある。予測は極めて難しい」と述べる。スペイン風邪の時も、ウイルスの毒性は流行の過程で大きく変化した。第一波より第二波と、ウイルスの毒性は高くなっていった。

当時の様子を記した「流行性感冒」(内務省衛生局編)によれば、第一波の流行で比較的被害が軽微であった地域は、流行の第二波で大きな被害を受けた。第二波の流行による死亡率は第一波の四・五倍。一方、第一波で流行を経験した地域では第二波の被害は比較的軽微であったとある。

○　○　○

もちろん、そうでない場合もある。例えば、六八年から六九年にかけて世界的流行を引き起こした香港風邪は、結論からいえば、穏やかな流行を引き起こしたにすぎなかった。六八年七月中旬、「中国南東部で急性呼吸器疾患の局地的流行が起こっている」とイギリスの新聞が第一報。同月、流行は香港へ広がり、香港では二週間で患者数が五十万人を超えた。すぐにウイルスが分離され、その流行が新型インフルエンザウイルスによるものだと確認されたが、症状は穏やかなままであったため、その後の流行の様相ははっきり確認されなかったという例もある。

ウイルスの毒性の変化がわからない以上、警戒を緩めることはできない。一方で、今回のWHOによる発生宣言は、チャン事務局長が記者会見の中で言ったように「かつてないほど備えのあるなかでの新型インフルエンザ発生宣言」だった。WHOは高いレベルでの警戒態勢を維持するように要請すると同時に薬品メーカーに治療薬の生産増強を要請した。現段階で、対応は迅速に進んでいると思う。今必要なことは、地球物理学者寺田寅彦が言った「正しく恐れることが一番難しい」という「正当な危機感」を持つことだと思う。

やまもと・たろう　1964年竹原市生まれ。長崎大医学部卒業。外務省国際協力局課長補佐などを経て昨年から現職。著書に「新型インフルエンザ」「ハイチ　いのちとの闘い」など。長崎市。